

宗勢の現状と展望

——都市化地域における寺院活動——

久 住 謙 是

(現宗研調査主任)

都市化における宗門寺院の分布

寺院（教会・結社）は、宗門の布教拠点であり、檀信徒の信仰依拠の道場である。日常的に先祖供養や祈願の法要儀式を営むところである。

その意味で、寺院は宗門の教勢を示す一つの手がかりである。しかし、寺院個々の機能から分類すれば、回向と祈禱に大別できるが、その活動内容には相違があるであろう。檀信徒数の多寡、墓地の有無など、寺院（教会・結社）個々を同一に論ずることはできないことをあらかじめ断っておかなければならない。このことを踏まえた上で、寺院分布図を作成した。都市化現象の地域における宗門の「都市開教」の現状を立地論的に検討し、今後の伝道に資する一端としたい。

都市化現象という語が、日常的に使用されるようになったのは、第二次世界大戦後、急激な都市人口の増加が問題視されるようになった頃からより顕著になった。

都市化現象は、土地利用や施設の転移なども指標にあげられるが、一般に人口の集中を有力な指標とする人口論的

意味で用いられ、農村の過疎化現象と対照する語である。

都市の人口増加は、内部的な自然増とともに外部からの流入がある。

都市の発展は、つねに外部の人口を吸収して成長する社会経済的必然性をもっている。

江戸から東京へ、世界的な巨大都市として発展し続けてきたのは、たえず外部の農村人口を、産業経済の増強に対応して吸引してきた歴史でもある。

戦後、昭和三十年代の高度経済成長は、農村から都市へ、地すべりの人口の大移動をもたらし、大平洋ベルト地帯といわれる広域の都市地帯を生み出し、一方では人口流出に伴う極端な農村の過疎化を生むこととなった。

農村における就労人口の流出、出稼ぎ、そして挙家離村は、伝統的な農村社会の变革を余儀なくさせ、檀家の離散、寺院の維持困難、無住寺院の出現などが顕在化した。

一方では、本来、都市生活は、農村的身分秩序、煩瑣な血縁的地縁的關係から開放され、農村的な静に対して動的な生活リズムであり、交通・情報・教育に恵まれた文化的合理的で快適な生活環境の憧れがあった。少なくとも昭和三十年代は、豊富な就労の機会とともに、都市への人口集中の吸引力となった。

しかし、急激な都市化現象は、住宅問題をはじめ、道路の渋滞、通勤地獄、大気・水質・土壌の汚染、騒音、悪臭、日照問題、景観の破壊、都市廃棄物など、人口過密がもたらすさまざまな都市公害が、都市環境の整備に先行してひき起こされている。

現在、農村から都市への人口移動が、停滞あるいは、むしろ、都市から農村へUターンまたはJターンの傾向になったといわれる。しかし、これは、農村から都市、移住可能な労働人口の払底を意味し、Uターンは一次産業への復帰ではなく、地方都市への再就職であり、根本的な過疎化解消につながるものではない。

かつて八割の農村人口、二割の都市人口が、現在、約八割が都市人口であろうといわれている。農業から工業化へと、社会的経済的構造の変革は、依然として、過疎・過密問題が農村と都市の問題としてある。

過疎地の農村寺院問題とともに対照的なたちで過密地の都市寺院問題があることは、すでに指摘されてきているところである。

今日のはげしい社会変動にゆれ動き、切実な生活の不安は増大し、価値体系の多様化、精神や思考のありようにもさまざまな変化をもたらし、従来の家はずれて核家族化が進み、人間一人ひとりが疎外と断絶、不安と危機にうずまき現代に、宗教的に真空状態に置かれた宗教的浮動人口を都市化現象は多量に創出させている。

都市生活の物質中心のなこうしたきびしい環境下で、心の救済が何よりも求められている。新興宗教の急成長と日本の構造的変革の時期と軌を一にしていることは、知られている通りである。

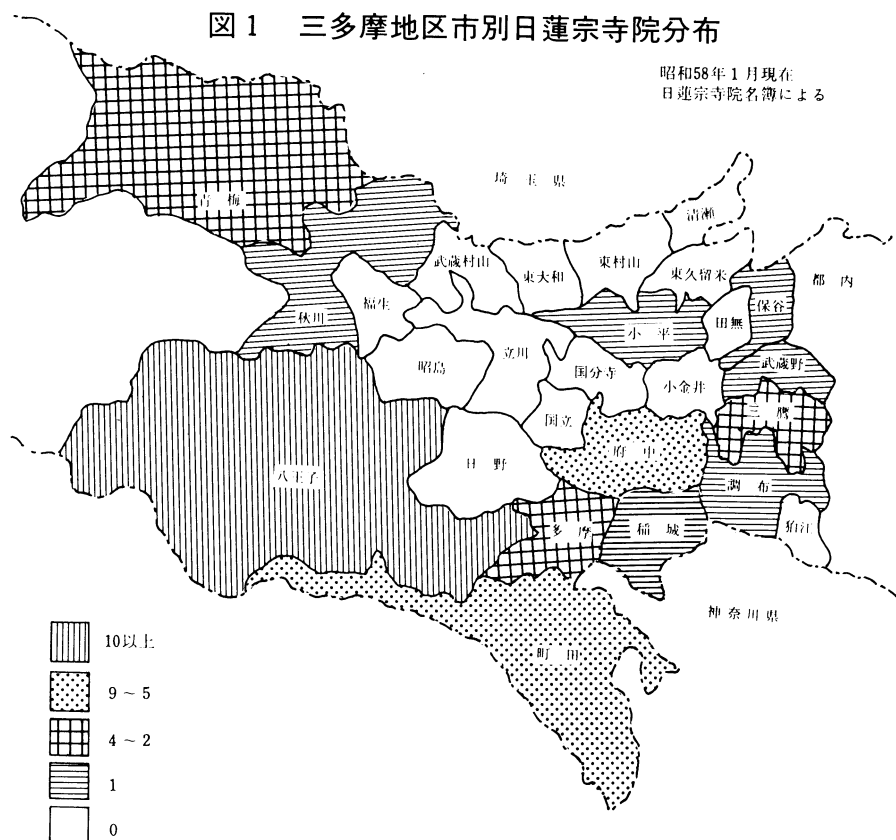
日蓮宗の檀信徒、および寺院・教会・結社も、過疎と過密のさまざまな社会変動に直面している事実は、さきの『日蓮宗宗勢調査報告書（昭和五十五年度）』でも明らかである。ここでは、とくに、都市化現象化における状況を、東京都下三多摩地区にその事例を求め、人口の増大と寺院との関わりを調査して、都市域における寺院活動の現状を通して、将来の都市開教のあり方を考えてみたい。

三多摩地区市部の日蓮宗寺院（図1）

「図1」は、日蓮宗寺院名簿に基づいて作図したものである。三多摩地区において市制がしかれている二十六のうち十四市、すなわち過半数の市制施行地域に宗門の寺院がゼロであるということである。八王子十二カ寺・町田七カ寺・府中五カ寺の順に多く、他の九市においては、わずかに一〜二カ寺にとどまっているのが宗門寺院の分布である。

図1 三多摩地区市別日蓮宗寺院分布

昭和58年1月現在
日蓮宗寺院名簿による



「図1」の白部分は、宗門寺院無しの市域を表わしている。改めて宗門寺院の現状が知られる。

寺院数の最も多い八王子は、城下町、交通の要衝といった歴史があり、一九一七年、市制施行が最も早く、市域が広く、三多摩最高の人口を擁している。町田も同様に伝統があり、寺院の建立も一様に古い。府中は、都市化の比較早い時期に多摩霊園が開かれたことと寺院立地の要因が関わっていると思われる。

宗門寺院ゼロの市は、六十年代以降に市制を敷いたより新興都市地区に多くみられるのが特色であり、今後の開教課題の地域と目されるといえよう。

仏教各宗派寺院の分布（表1）

さきの日蓮宗寺院の分布を、仏教各宗派の寺院数との比較を試みたのが「表1」である。

主要各宗派の寺院数を、昭和五十五年度の東京都宗教法人名簿に基づいて表示した。

三多摩地区市制施行地区の全寺院数は五百三十三カ寺である。曹洞宗百十六カ寺を最高に禅系の各派寺院が最も多い、次いで豊山派・智山派の真言系、浄土宗・真宗本願寺派の浄土系、そして天台系・日蓮系の順となっている。日蓮宗は四十カ寺、全寺院に占める七%であり、宗門寺院の最も多い八王子においてさえ、市内全寺院の一割強にすぎない。

八王子の百四十八カ寺は、主要各宗派の寺院数が他の市に比べて群を抜いて多いのが目だつ。次に、青梅・町田・府中・調布・秋川の順に寺院数が多くなっている。とくに曹洞宗が八王子・青梅・府中に、天台宗の調布などに、それぞれの宗派寺院の偏在がみられ、教化の歴史的集積の跡が認められる。

表1 三多摩市制施行地区仏教各宗派寺院数（法人）

昭和55年 東京都宗教法人名簿に基づく

地区名 包括団体名	八 王 子	立 川	武 蔵 野	三 鷹	青 梅	府 中	昭 島	調 布	町 田	小 金 井	小 平	日 野	東 村 山	国 分 寺	国 田 立	保 無 谷	福 生	狛 江	東 大 和	清 瀬	東 久 留 米	武 蔵 村 山	多 摩	稲 城	秋 川	合 計		
日 蓮 宗	16		1	2	2	5		1	7	1	1					1	1						1		1	40		
日 蓮 正 宗	3							1						1							1					6		
日本山妙法寺大僧伽				1																						1		
法華宗陣門派						1						1														2		
法華宗本門派			1																							1		
本 門 仏 立 宗	2																									2		
浄 土 宗	5		1	1		4		2	3			2						1		1				1		21		
浄土真宗大谷派	2		2	1		1			1				1			1							1			10		
浄土真宗本願寺派	4	1	1					11	1	1	1	1			1	1	1						1			24		
真 宗 高 田 派	1					1		1																		3		
時 宗	3				2	2																		1		8		
曹 洞 宗	36	1	1	1	32	2	3		19	2			1	2	1			1		1	1	3	1	1	4	1	2	116
黄 檗 宗				1							1				2											4		
臨済宗妙心寺派	2		1						2		1										1					6		
臨済宗南禅寺派	18																								2	20		
臨済宗大徳寺派						1							1													2		
臨済宗円覚寺派											2															2		
臨済宗建長寺派	1	5			9		2	1	2			2	1	1	2		4					1		2	14	47		
臨済宗国泰寺派										1																1		
真言宗豊山派	4		1		16	9	1		2	3	2	1	1	3			1		4	1		1	1	3	4	60		
真言宗智山派	27	1	1			1			1			9			1		3		1		2		5			51		
真言宗醍醐派	2				2																					4		
高野山真言宗	1								2																	3		
新義真言宗				2				2																		4		
天 宗												1														1		
真 如 苑		6					1																			7		
天 台 宗	6			1	1	6	6	9	1		1	1	1					4		1	2			3	2	45		
天 台 寺 門 宗									1																	1		
修 験 宗									1																	1		
そ の 他	15		3	4	3	2		2	3	2	1		2	1			1								1	40		
合 計	148	14	13	14	67	35	13	30	46	10	10	18	9	9	3	3	7	6	6	6	6	7	3	14	10	26	533	

日蓮宗は、三多摩地区において、寺院を指標とした場合、そうした教化の宗門的發展・伝道の歴史は認め難く、主要各宗派より教化のたち遅れが目だつ。しかし、視点をかえて、区部を含めた東京都全体における日蓮宗寺院は四百三十七カ寺（東京都宗教法人名簿）に達している。これは第二位の浄土宗四百三十カ寺よりも多く、東京都における各宗派中最も多い寺院数であることがわかる。これは、池上本門寺を頂点として、隣接県の千葉・神奈川とともに都区内における教化が歴史的に他宗を凌駕して進められてきたことを物語っているといえよう。反面、都下多摩地区には、いまだ教化の手が届いていないことを、「表1」から知ることができる。都市化地域における現代に対応した寺院づくり、布教の拠点が何よりも望まれているところであろう。

都市化地域の日蓮宗寺院の現状（表2）

さきに略述した過半数の市において、日蓮宗寺院が一カ寺も存在していない現状を、さらに寺院・教会・結社と人口比（一カ寺当りの人口）を中心に、表示したのが「表2」である。

東京における周辺地域への都市化は、神奈川・千葉・埼玉、さらに交通機関の時間の短縮、縮少は距離の拡大となつて茨城・栃木・群馬の各県へ波及し、さらに周辺衛生都市内部においても、中心から周辺へと遠心的に広がりがつがある。反面、都心の区部における人口減少の傾向があらわれている。地方からの流入とともに、都市郊外への移住が三多摩地区に志向し集中している。

三多摩地区の都市化現象の指標として、人口増加による町村から市への移行があげられる。八王子と立川は、太平洋戦争以前の市制施行であり、その他二十四市すべてが戦後の施行である。四十年代が一、五十年代が六、六十年代が七、七十年代が九、時が下るに従って増加し、各市間は、町村が介在せずにつながった状況となった。

表2 三多摩地区市別日蓮宗寺院・教会・結社と地域人口比

市 名	寺 院	教 会	結 社	左 の 合 計	教 師	人口 (千人)	1カ寺当り人口 (教会・結社含む) (全国平均比) 22,336人	面 積 (km ²)	1カ寺当り面積比 (教会・結社含む) (全国平均比) 5.3km ²	市制施行年 (西暦)	仏教各宗 派寺院教	1カ寺当り人口 (全国平均比) 1,300人
八 王 子	12	5	3	20	27	362	18,100人	187km ²	9.35km ²	1917年	148	2,446人
立 川						141		24		1940	14	10,071
武 蔵 野	1			1	1	133	133,000人	11	11.0	1947	13	10,230
三 鷹	2			2	2	159	79,500	16	7.9	1950	14	11,357
青 梅	2	1	1	4	4	94	23,500	104	2.3	1951	67	1,402
府 中	5			5	8	183	36,600	29	5.8	1954	35	5,228
昭 島						86		17		1954	13	6,615
調 布	1		3	4	4	173	43,250	21	4.3	1955	30	5,766
町 田	7			7	13	277	39,571	71	3.9	1958	46	6,021
小 金 井		1		1	4	99	99,000	11	11.0	1958	10	9,900
小 平	1		1	2	2	149	74,500	20	10.0	1962	10	14,900
日 野						139		27		1963	18	7,722
東 村 山						116		16		1964	9	12,888
国 分 寺						87		11		1964	9	9,666
国 立						63		8		1967	3	21,000
田 無		1		1	1	65	65,000	6	6.0	1967	3	21,666
保 谷	1			1	1	91	91,000	8	8.0	1967	7	13,000
福 生						48		10		1970	6	8,000
狛 江						68		6		1970	6	11,333
東 大 和						63		13		1970	6	10,500
清 瀬						61		10		1970	6	10,166
東久留米						105		12		1970	7	15,000
武蔵村山						56		15		1970	3	18,666
多 摩	2			2	2	85	42,500	20	10.0	1971	14	6,071
稲 城	1		1	2	2	46	23,000	17	8.5	1971	10	4,600
秋 川	1			1	2	41	20,500	22	22.0	1972	26	1,576
計	36	8	9	53	73	2,990	56,415	712.0	13.4		533	5,610

日蓮宗寺院名簿 (S.58.1) 朝日年鑑 (1980刊) 東京都宗教法人名簿 (S.55)
現代人の信仰構造 (藤井正雄著S49) に依る。

因みに、昭和十五年の人口と比較すると、八王子は四百%、国立は一千三百%、多摩市は一千六百%の増加であり、戦後三十年以降は激しい増加となっている。この人口急増地域、とくに立川・日野・東村山・東久留米の人口十万人以上の都市に宗門寺院の建立がないこと、比較的市制施行の新しい福生・狛江・東大和・清瀬・武蔵村山などにも同様に宗門寺院がない。

日蓮宗寺院名簿によると、寺院三十六、教会八、結社九である。教師数は七十三人である。寺院・教会・結社を三多摩地区市部の人口と対比すると、五万六千四百十五人に対して一カ寺（教会・結社を含む）設立されており、四万九百五十八人に対して、日蓮宗教師が一人活動している計算である。（寺院名簿に記載された教師数で単純計算したものの）。

これは、日蓮宗の全国平均の二・五倍の人口を対象としていることになる。人口十万人当り、一・八カ寺建立されている計算は、日蓮宗全国平均四・五カ寺を下回り、東京都全体の平均四・一カ寺から見ると、三多摩地区がいかに宗門寺院が少ないか、換言すれば、都市化地域における教化対応の遅れた未開教地域であるといえよう。

都市化地域の宗門寺院の設立年代（表3）

今日にいたるまで半世紀の間、三多摩地区における寺院・教会・結社の設立は、昭和十四年の一カ寺を除いて、すべて戦後のものである。いわゆる都市化現象地域に立地した新寺院創立を年代別にみると、「表3」のようになる。明治以前が十八カ寺、明治・大正期はなく、昭和期の戦前が一カ寺である。

戦後は、昭和二十年代が四カ寺、三十年代が三カ寺、四十年代が七カ寺、五十年代は現在まで二カ寺である。

今、仮に、昭和戦前の建立を旧寺院とし、戦後の建立を新寺院とつけた場合、旧寺院は、十四世紀後半から十六世

表3 設立年代別寺院数

(日蓮宗寺院大鑑 池上本門寺編(S56)に依る)

設 立 年 代	寺院	教会結社
明治元年 (1868) 以前	18	
明治年代 (1868～1912)		1
大正年代 (1913～1925)		1
昭和年代(戦前) (1926～1945)	1	
昭和20年代 (1946～1954)	4	2
〃 30 〃 (1955～1964)	3	1
〃 40 〃 (1965～1974)	7	5
〃 50 〃 (1975～)	1	

不明は除く

紀代の創立が八王子・町田を中心にみられ、明治・大正・昭和初期までの間は一カ寺の建立もみられない。一方、戦後の新寺院の建立は、わずかに三十余年の間に、旧寺院と比肩する増加をみせている。さらに、教会・結社が、明治・大正期の二に対し、戦後は八を数える増加を示し、やがて、これら教会・結社が寺号公称へと発展させる要素を持ち、さらに新寺院建立の伸びが予想される。

当地区の寺院・教会・結社設立の年代から知られることは、極めて新しい時代に、急速に伸びたことである。これらは、都市化現象に伴う人口の増加と軌を一にし、周辺町村の市への移行とも同時期である。すなわち、戦前からの都市化の波が、戦後の経済的急成長、東京都の人口吸引力の増大に伴って急速に周辺部へ波及した時である。国電中央線を中軸とする交通網の整備、電化、時間の短縮、通勤圏の拡大、新駅の開設など、初期の市街化が主要駅周辺の点の範囲から面的な広がりへ、遠心的に拡大され、農村地区から住宅地・工場・商店などへ土地利用の変化をみせつつ、都市化現象が、急速に進められた社会的背景と、この新寺院・教会・結社の設立は、時期を同じくしていることが知られるのである。

しかし、さきに見た通り、宗門的には新寺院建立が顕著に認められたとしても、三多摩地区の人口増加率、寺院設立と人口比から見た場合、依然として全国的に最も少数寺院にとどまっている。人口増加に対応した開教伝道の速やかな取りくみが、重点的に進められるべき地域である。寺院を指標として、都区内の進んだ教化活動に対して、当地区の立ち遅れが目立ち、人口急増地域に居住する宗門檀信徒が、寺院と教師の教化能力を超えて、教化活動が及ばず、

放置され宗教的浮動人口に組みこまれかねない状況こそ、都市過密地域の問題点であろう。

都市化地域の寺院立地の傾向(図2)

「図2」は、都市化地域における寺院・教会・結社の設立分布を示したものである。

一カ寺(教会・結社) 一印の○□を示し、その中の数字は、新寺院(教会・結社) 設立昭和年度を入れた。設立年代と地域の所在をみようとするものである。

さきに「表3」でみた設立年代別寺院・教会・結社は、伝統的旧寺院に新寺院が重層した立地が認められ、それら新寺院は、人口増加・都市化に伴って設立されて来たものであるが、この「図2」によつて、さらに立地の傾向を追跡すると、

一、既設寺院(都内市街地)――郊外へ移動(現在地へ設立)

二、現在地に教会・結社設立――寺号公称

三、現在地に寺院・教会・結社の設立

立地の傾向として上記の三型態にわけてみた。

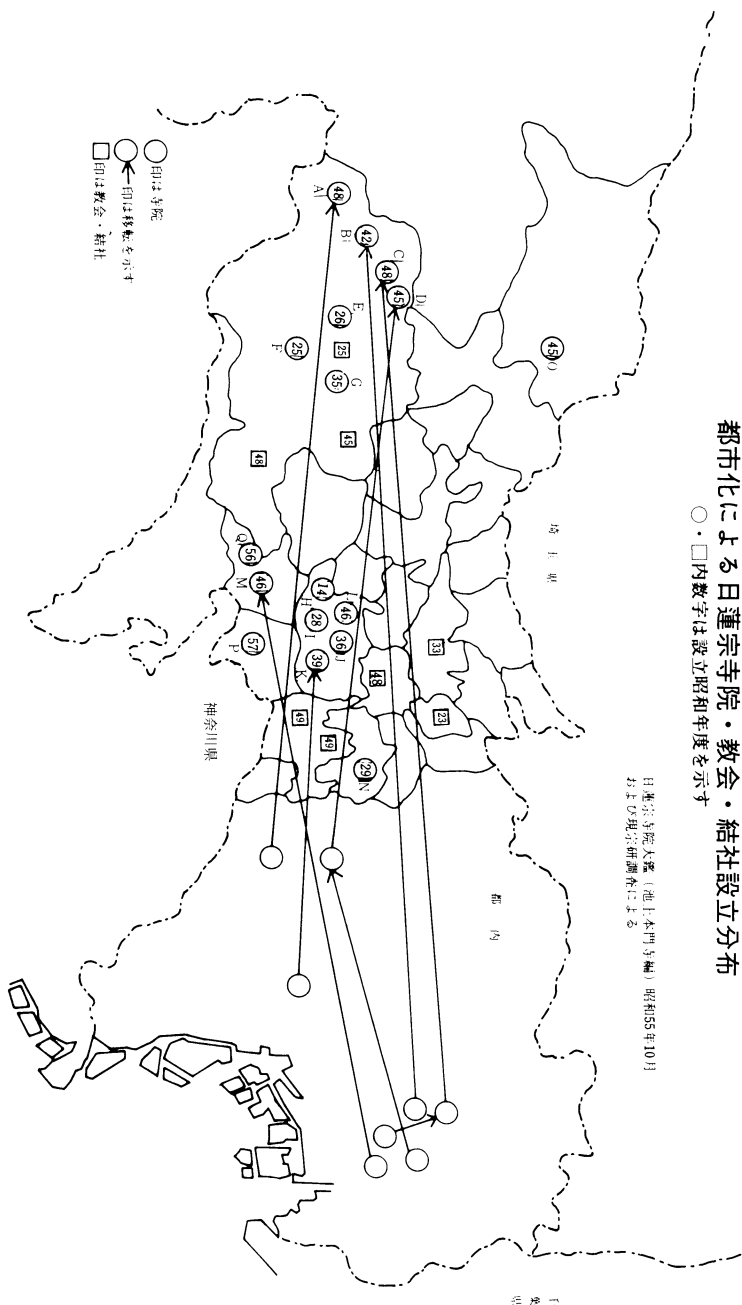
一については、「図2」のA・B・C・D・K・Mの各寺が該当する。それらは大体、昭和四十年代の時期に、都区内から図示のように、八王子・府中・多摩へそれぞれ移転させている。各寺院は都市計画・区画整備など個々の移転理由に基づくものであろう。その背景には、都市化に伴う要因が考えられる。とくに、寺院の主たる機能としての回向寺・祈禱寺に分けた場合、回向寺として、檀家Ⅱ境内墓地使用という結びつきから、無縁墓地の整理、移住離檀などの改葬による新陳代謝以外に、墓地の飽和状態は解消されず、したがって、いきおい都市郊外へ発展的移転を行な

図2 三多摩地区

都市化による日蓮宗寺院・教会・結社設立分布

○・□内数字は設立昭和年度を示す

日蓮宗寺院大鑑（池上本門寺編）昭和55年10月
および現宗研調査による



い、境内墓地の確保をめざし、都区内の檀家関係を継承しつつ、新檀家受容の型態を整え都市化に対応しつつ遠心的に周辺部に移転した例である。

C 寺の場合、図示するように、江戸時代の下町から当時の郊外杉並へ移り、再移転が八王子である。都市化現象に伴う寺院と墓地の移転改葬は、江戸時代からの歴史があったといえる。明暦三年（一六五七）の大火後、防火上、神田・八丁堀などから、当時の江戸郊外の浅草・深川・目黒へ、さらに関東大震災・戦災などで、深川・浅草から東京の郊外世田ヶ谷・杉並への移転改葬した宗門寺院が多くある。さらに都市化に伴う墓地の推移を東京の公営墓地についてみると、明治五年（一八七二）に青山・谷中・雑司ヶ谷墓地が開設、大正十二年（一九二三）に多摩墓地、昭和二十三年（一九四八）に小平霊園が開設された。時の経過、都市域の拡大と平行して、都心より郊外へ模式的にあらわれた移動である。

都市と寺院・墓地を立地論的に扱った場合、過密する都市内部から、郊外へ移転する動きを示し、墓地と寺院が、都市化現象の外側、つねに縁辺部に新たに立地していたことが判明する。浅草や深川、青山や雑司ヶ谷、世田ヶ谷や杉並は、その当時、江戸や東京の郊外であつたろうことが考察され、府中（多摩霊園）・小平と、時代ごとに都市郊外が外側に漸進拡大されてきたのである。

寺院の移転先と霊園の開設地が、都市化の指標としてみると、現在、八王子は、まさしく都市化現象の先端の市街化と縁辺部を形成している。私設の霊園が開設分譲されつつあり、新寺院建立の初象が認められる。

宗門の都区内よりの移転寺院が、墓地を伴う寺院⇨回向寺が、「図2」のように八王子の周辺部に立地しているのは、上記のような立地論的考察の延長として類推されるのである。

二について、都市化現象の人口増加地域に、教会・結社を設立し、布教活動の発展が成果として寺院の型態を整え

るようになった経過を辿っている。G・E・I・O・P・Qの六カ寺をあげることができる。いずれも、教会・結社として出発し、人口の増加、環境の都市化とともに檀信徒教化を進めてきた都市開教の典型ともいえる。E・F・G各寺のように、市街地に立地しているのは、教会・結社として比較的早い時期の活動であり、回向寺・祈禱寺としての機能を果たした寺院活動を窮わせる。都市開教のあり方として一つのモデルといえよう。

三の現在地に寺院・教会・結社の設立については、戦前の創立である府中H寺にみられる有力な檀信徒の結集による寺院建立もあるが、新寺建立には何からの経済的信仰的積み重ねが背景にあると思われる。府中の新寺院が比較的偏在して認められるのは、多摩霊園の存在が、直接・間接的に吸引力になっていると考えられ、祈禱寺としてより回向寺として立地要因が濃厚であろう。

教会・結社の設立は、分布上からみれば、寺院の立地条件に左右されるような偏向性はなく、各地に所在している。都市開教の先端を担い、信仰の依拠としての設立の意義は大きいものがある。

新寺院建立の困難に比較して、教会・結社の設立は容易である。都市化に即応した伝道は、この面の努力に期待すべきであろう。

結 び

宗勢の現状と展望と題して、その一端、都市化の開教問題を、寺院立地論的に考察した。都下三多摩地区を例に、都心（区部）の布教が仏教各宗派に凌駕して盛んである反面、都下のそれは、伝統的に教化が及んでいない。加えて都市化現象、人口急増地域となった現在、人口比、十万人当り一・八カ寺という布教拠点の絶対数の不足を指摘したが、こうした現状は、三多摩地区に居住する宗門檀信徒が、一定の寺院との関係を絶った宗教浮動人口へと移行され

てしまう恐れがある。都市流入家族が地方の菩提寺と継続しつつも交流の稀薄化を招き、都市における菩提寺(墓地・信仰の依拠)は求め難く、農村的寺檀関係の意識を放棄させ、宗門との宗教的関連を消失させつつある。一方、こうした背景が、霊園に墓地を求める傾向と、特定の寺檀関係を結ばない核家族化した家が創出され、一過性の葬儀・回向・納骨所といった形での寺院との結びつきが顕著となっており、そうした関わり方も多様化しつつあるのが特色として指摘される。すでに『日蓮宗宗勢調査報告書(昭和五十五年度)』に報告されている都市的未開教地区は、隣接の埼玉県にも共通して認められ、千葉・神奈川両県、及び全国の大都市圏における共通した課題となっている。

これらは、過疎問題(第三十五回日蓮宗教学研究発表大会にて発表、「立正公論」三十号に掲載)と一具して問題視されるべき現代に対応した布教活動の基本的認識であろう。

宗門の一割以上の寺院が、無住と教師の日常的活動停止という過疎問題の現状と、急激に急増した都市人口に布教の手がさしのべられていない現状こそ、伝道宗門をめざす今日の大きな課題である。